

キュンメル事件

ラインハルトが、即位後最初の行幸先としてハインリヒ・フォン・キュンメル男爵邸を訪れたのは、当初予定されていた三月七日から遅れること二週間、三月二日のことである。新皇帝の予定を大きく狂わせることになったのは、発足早々の新体制を襲った不協和音のゆえだった。

ラインハルトを大いに戸惑わせ、同時に憤激させたことには、不協和音の音源が、彼の最も信頼する國務尚書と首席秘書官……すなわち、マリーンドルフ伯爵父娘を中心としたものであったことだった。

「大変に申し上げにくいことではありますが……」

ブルックドルフ司法尚書の提出した書類を一瞥した瞬間、ラインハルトの眉宇に雷光が閃いたように見えた。

「これは何か、司法尚書。マリーンドルフ伯爵への告発状ではないか」

「左様でございます、陛下」

ラインハルトの眼光に射すくめられたとしても、ブルックドルフは新皇帝の最初の内閣の一員たるべき義務を放棄しなかった。昨年一〇月末に帝国の最高検察庁からの最初の報告があったこと。誣告や何らかの陰謀の疑いもあり得たためと、ちょうどバーミリオン会戦直前という時期であったことから、なお裏づけ調査を進めさせ

たこと。その結果として、やはり皇帝の判断に委ねざるを得ないと結論づけざるを得なかったこと。

ブルックドルフの説明が進むに連れ、ラインハルトの表情からは怒りは消えぬものの、困惑の色が広がり始めていた。

「バウアーシュミット医師のことは余もよく知っている」

帝国宰相府詰め¹の当直医を務めていたフランツペーター・ヨハネス・バウアーシュミット医師が、宰相執務室で昏倒したラインハルトを診断したのは一年前の一〇月末のことになる。以来、バウアーシュミット医師の進言によって、ラインハルトだけでなく帝国政府と軍の高官は年に二回の定期精密検査の受診が義務づけられていた。自ら定めた義務に忠実であるとするラインハルトであるから、戦場にあっても受診を欠かせたことはない。

オーデン文理科大学医学部の准教授でもあり、優秀な臨床医学者としての評価も受けている、そのバウアーシュミット医師がある新たな疾病の研究に取り組んでおり、その研究費をマリーンドルフ伯爵家の主宰する基金から受けている。これは、ラインハルトにとつては初耳だった。

「これは事実か」

とは、ラインハルトは問わない。ブルックドルフが虚言や讒言とはほど遠い為人^{ひと}であることは、彼をその地位に就けたラインハルト自身が知悉している。ブルックドルフが事実と認める以上、事実であると判断されるに足りる裏付けがあると言つべきだった。

報告は言う、バウアーシュミット准教授は研究目的と称して、大量の個人情報……最も詳細なレベルでのDNA情報を含む病理学的情報を収集しており、その中にグリーニュールト伯爵夫人アン

ネローゼのものまで含まれているというのだ。特にアンネローゼに関する詳細な個人情報に厳しく規制されており、本来はパウアーシュミットが手にできるものではなかったはずである。

ただし、パウアーシュミット医師が完全に不正な手段によって情報を入手したわけではない。情報へのアクセスについては正規の申請書が出されており、マリーンドルフ國務尚書による許可が出されている。

「グリューネワルト伯爵夫人に関する情報へのアクセスについては、陛下ご自身の命令で最高度の規制がなされております。本来は、國務尚書の判断で許可を出せるものではありません」

「む……」

ラインハルトの表情が苛立ちを浮かべ、執務デスクを叩く指先の動きが速くなった。

パウアーシュミット准教授への研究資金提供についても疑問がある……ブルックドルフはかまわず続ける。

「伯爵家の資産をもとにした基金であって、これ自体に問題はありません。同時に複数の研究テーマを募集し、その内の一つにパウアーシュミット准教授が応募し、伯爵家がこれを許可する形での資金提供ですから、不正と呼べるものではありません」

「……大量の情報収集と処理にかかる費用を提供し、姉上のものを含めて個人レベルの秘密情報入手するための手段を提供した……卿はそう言いたいのか？」

「御意。それが、この報告の内容です」

ラインハルトは小さく唸って報告書に視線を戻した。

「他にパウアーシュミット医師が入手した情報はどのようなもの

があるのか？」

「特にほございませぬ。精密検診情報に限られますし、それで直ちにどつこうという問題になる類の情報ではありません……が、笑殺して看過するにはいささかことが大きございます」

再びラインハルトは咽喉の奥でうなり声を飲み込んだ。遺伝を盲信したルドルフの時代ではない。アンネローゼやひいてはラインハルト自身に遺伝学的な問題があるとして、それが何らかの政争や混乱をもたらす恐れなどない。早い話、ラインハルト自身の父セバステイアンは酒浸りとなって生活に窮し、娘を売り飛ばして生活を保障された挙げ句に、アルコール性の障害によって急逝した。言ってみれば性格破綻者である。今、玉座に就いているのは、その性格破綻者の息子なのである。

遺伝への盲信……その一言がラインハルトの記憶をさらに遡らせた。中佐時代、巡航艦『ヘーシュリッヒ・エンチェン』を駆って同盟領に侵入したあの作戦にも、愚かしい遺伝への盲信が絡んでいなかったが、ラインハルトが情報を握りつぶしたこともあり、ことが公になることはなかった。そう言えば……

「パウアーシュミットが正規の許可を経ずに、最高レベルを指定された情報入手できたことが問題ということか」

軽く首を振りやうって、ラインハルトは埒もない追憶を脳裡から追い払うが、不愉快さは隠しようもなかった。フロイデンに隠棲した彼女に、第三者が接触する手掛かりを全て封じようとして、アンネローゼに関する情報を最高レベルの機密になど指定してしまっただのは、行き過ぎだったかもしれないと思つた。パウアーシュミットは単に研究テーマである疾病に関する情報を少しでも多く得た

かつただけであらうし、マリンドルフ伯爵もまた、バウアーシュミットの医師としての情熱を認めて便宜を図っただけのことに違いない。ブルックドルフが問題にしているのは、帝国が最高機密と定めた情報に、著名な臨床医とはいえ、民間人に過ぎないバウアーシュミットがいつも簡単にアクセスしてしまったという、情報管理の欠陥だった。

「ブルックドルフ、バウアーシュミットの研究している病とは何だ？」

「はて……」

さすがに虚を突かれたのか、ブルックドルフが目を睜けてから慌てて手許の端末を操作しようとするのをラインハルトは止めた。「分からなければ後で良い。なぜ、彼が姉上の情報を得ようとしたのかを知りたかっただけだ」

「……であれば、バウアーシュミット准教授を直に審問なされば宜しいかと。憶測はあらぬ噂、流言飛語の火元となるかと存じます」

「卿の言いつ通りだな。だが、一医師の研究テーマについてまで一々直に審問していたのでは、幾ら時間があっても足りぬ。余が直に話を聞くなら、もっと相応しい人物がいるではないか」

「では、早速にマリンドルフ伯を……」

「良い、この件は余が預かる。伯には余が直接に話をする。卿は、バウアーシュミットに意図を確認して余に報告せよ。彼への措置は追って指示するが、取りあえずは行動の軽率さを譴責する旨を申し伝えよ。良いな」

「御意」

「余り重々しくするな」

悪戯を咎める程度のことにはせよ、というラインハルトにブルックドルフも強ばった表情を和らげた。

「御意」

退出するブルックドルフの背を苦い顔で見送ったラインハルトは、スクリーンに別の書類を浮かび上がらせた。人類の歴史を通じて、軋轢も摩擦もない組織は皆無だが、ローエングラム朝銀河帝国もまた稀少な例外では有り得ない、その証左がスクリーンの中にあつた。

無論、新皇帝ラインハルトの元、新帝国政府は、ゴールデンバウム王朝下でのそれが情眠……ある人物の評言を借りれば冬眠状態……に見えるほどの活発さで、内政の整備にすべてのエネルギーを傾注している。

大小無数の貴族領での内戦や海賊の跳梁で荒廢の進んだ帝国領内の再整備、特にリップシュタット戦役で主を失った旧貴族領の再編成には、まず旧帝国と旧貴族領の間に関わる各種の有形無形の法律や契約のしがらみを解きほぐさねばならず、それだけでも気の遠くなるような作業量が予想された。三三歳で尚書の席を得たブルーノ・フォン・シルヴァーベルヒの主導下、新設の工部省には多数の若手官僚が抜擢を受け、これらの膨大な業務に精力的に取り組んでいた。これまで、帝国政府の直轄領と貴族領とに分断され、それぞれで独自の整備や開発の行われていたあらゆる社会インフラの統一と全体最適による再編成、加えるにラインハルトの密かな構想であるフェザーンへの遷都もまたシルヴァーベルヒの手腕のもと、急速に実現に向けての歩みを速めつつあつた。

一方、長年の門閥貴族支配と、一五〇年にも及ぶ自由惑星同盟

の戦いから来る、帝国社会の歪み、ことに、長年の門閥貴族支配の下でやせ細ってしまった中間階層の再建が喫緊の課題だった。旧帝国では富が門閥貴族とその関係者にも集まる一方で、彼らの不正な特権……納税他の義務からの免除……と相俟って、一般民衆の特に中間階層と呼ばれる人々に負担が集中する傾向が極めて強かった。その一例が兵役義務であり、同盟との戦いを通じて、最も危険な前線へ投入される兵士の大半が、この中間階層出身者だったと言われるほどである。

一方的な負担を強いられた人々は、やがて負担に耐えきれずに没落し、社会の最下層への転落を余儀なくされる。すでにゴルデンバウム王朝第三〇代皇帝コルネリアス二世の時代、帝国の民衆の過半がいわゆる最下層と呼ばれる生活状態に陥っており、納税者の急減による国庫の枯渇と共に、教育を受けた人的リソースの窮迫が現実の問題として浮上してきていた。貴族への課税と義務負担の公平化、民衆への救済措置の拡大が唯一の解決策として論じられ始めたのもこの時期だが、門閥貴族からの反発が大きく、さらに決定的だったのはコルネリアス二世自身が極端に固陋な保守主義者であつたことだろつ。

「貴族に課税するなどならぬ。それは大帝陛下のお定めになった帝国の祖法に反する」

政府と宮廷を揺るがせた議論と、最後には一〇数件ものテロ事件をまで招いた結果、辛うじて皇帝への上奏に付された貴族への課税案……実際には甚だ不満足な内容であり、オイゲン・リヒターの言葉に拠れば『焼け石に水どころか水滴一滴』でしかなかったが……ですら、コルネリアス二世は一顧だにしなかった。

コルネリアス二世時代の財務官僚が密かに恐れた『帝国の破産』は、第五代皇帝オトフリート五世……史家の中には彼を『吝嗇帝』と呼ぶ者も少なくないが……吝嗇ぶりによって辛うじて回避された。オトフリート五世と並んで帝国財政の破綻回避に一役買ったのが、強精帝オトフリート四世だったとされるのは歴史の皮肉と呼んで良いのだろうか。オトフリート四世の皇女の多くがオトフリート五世の時代に成人したが、オトフリート五世は彼女らを貴族に降嫁させる際に多額の結納金を納めさせた。さらに、多くの貴族がオトフリート四世の皇子を養子に迎えさせられたが、これを歓迎したのは辺境領を領する辺境伯マルクグラーフと呼ばれる貴族たちだった。彼らは皇帝の子弟を養子に迎え入れ、新たな爵位を得て宮廷への足がかりを得たが、彼らの開拓してきた領地は皇帝直轄領に組み込まれ、国庫の収支バランスの改善に大きく寄与したのである。

オトフリート五世は、積極的な政治的識見によって『吝嗇帝』たり得たわけではなく、その蓄財はまったくの『個人的趣味』と酷評される。とは言え、彼が国庫に積み上げた資産が、その後の半世紀のゴルデンバウム王朝の継続をもたらしただけでなくもないのである。ただ、そうして蓄えられた資金はフリードリヒ四世による濫費と、同盟との戦費で霧消し、旧帝国は再び急速な財政悪化の泥沼の中に沈み込みつつあった。ラインハルトが歴史に名を刻み始めた時期の、それが帝国の一般的な状況でもあった。

ラインハルト自身は、民衆による政府……自由惑星同盟が標榜する議会制民主主義というものに興味はなかったし、近い将来に帝国で選挙を実施したり、議会を開く考えもなかった。ラインハルトの政治家として有能さは、自ら一定の資産を持ち、良く教育されて、

社会の維持に理解を持つことで、社会の安定に資する……そうした意味でのいわゆる中間階層の育成についての重要性を十分以上に理解していたことだろう。理解していただけでなく、それがゆえに民政省を設立し、信頼する閣僚であるカール・ブラツケに尚書の任を委ねたことは事実だった。

ブラツケもまた、彼の僚友であるリヒターに言わせると『突進する猛牛の勢い』で民政の改革にいそしんでいる。既にかつて晴眼帝マクシミリアン・ヨーゼフ二世時代に開設され、その後、閉鎖された教育訓練学校の再開と増設が決まっており、帝国臣民の六〇パーセントを超えと言われる貧困層への救済と再教育のプロジエクトが急ピッチで進められていた。

ともかく草創期の国家特有の活気と進取の意欲に溢れた新銀河帝国ではあったが、既に述べたように軋轢と摩擦から無縁の組織はあり得ず、新帝国もまた例外ではない。ラインハルトの眉を顰めさせている一つの事例、今、執務机のコンソールに表示されているのが、それだった。

外交である。

ラインハルトは典礼省を廃し、工部省と民政省を新設して帝国の内政に意を払ったが、外交を司る部署は設けなかった。旧帝国時代から、帝国は自由惑星同盟を対等の国家として認めていない。『神々の黄昏』作戦の結果、帝国と同盟はバーラトの和約を結んだが、帝国が同盟を独立した主権国家として認めたか否かは曖昧なままとされた。

「相手が国家であろうとなかろうと、バーラトの和約を履行させる上での障碍は何もない」

それが帝国首脳の一一般的な認識であったし、ラインハルトの考えも大きく外れるところはない。バーラトの和約では、同盟首都に帝国の高等弁務官事務所が置かれることになり、現実にはレンネンカンプ上級大將がその任についているが、実のところ高等弁務官が帝国のいずれの省の管轄下となるかは曖昧なままだった。ラインハルトも、あるいはジークフリード・キルヒアイスさえ、数年を経ずして同盟が国家としての体裁を喪い、辺境宙域として帝国の吸収併呑するところとなると考えていた以上、その数年のために専管の省庁を設けるのはいかにも非効率と思われるからでもある。

高等弁務官事務所に対する指揮系統の件は、間もなく現実の問題としてラインハルトの前に現れてくるのだが、現時点でラインハルトを悩ませているのはバーミリアン会戦末期に、マリンドルフ伯爵令嬢ヒルダガルトことヒルダが取った行動に対する帝国政府と帝国軍からの反発だった。

同盟政府に無条件降伏を受諾させるについて、ヒルダは同盟政府高官の生命と財産の保全を約束している。ヒルダがこの条件を出していないければ、トリューニヒトが同盟政府を『裏切』って無条件降伏することはなかった。後世の史家の評価の一致するところである。ヒルダは、この時期の同盟政府高官が公人としての立場よりも私欲を優先させる傾向の強いことを見て取っており、一度ならずラインハルトにも進言している。艦隊決戦の成果に拠らず、一片の通告を以て同盟政府を屈服せしめよ、と。ヒルダの識見は見事に正鵠を得て、トリューニヒトの『裏切り』を引き出し、ラインハルトを窮地から救った。彼女の功績を、誰一人否定し得るものではなかった。まして、ラインハルト自身が『余はフロイライン・マリンド

ルフに救われた』と公言している以上、表立ってヒルダを非難するのは難しい。

にもかかわらず、帝国政府内には不協和音と呼ぶべきか、ヒルダの行動とその結果としてのバーラトの和約に対する密やかな不満と反感とが底流している。

「問題は叛徒に対する扱いの決定であり、叛徒の主魁に対する交渉権限は内務省に属する。フロイライン・マリンドルフは、幕僚総監代行の地位にあったとしても、同盟政府高官の生命と財産を保全するとまでの保証する権限はなかったはずである」

「ことは国家と国家相当の組織間での条約、あるいは契約事項に属する以上、幕僚総監代行の権限が、国家間条約・契約事項に及ぶとするのは無理がありすぎる。降伏条件については司法省の専管事項であるべきだ」

ことは、人類が官僚組織を採用して以来、数千年にも及ぶ歴史を持つ、『官僚同士の縄張り争い』だった。ローエングラム王朝下の帝国政府官僚は、人類史上でも類を見ないほどの効率と清廉さを併せ持った組織として知られることになるが、それでも官僚組織としての本性からは自由にはなれなかった。

まずは、『同盟との外交』に関して内務省と司法省、さらには国務省が縄張り争いにも似た暗闘を始めたようだが、経緯の詳細については膨大な記録の中に埋没したか、まったく記録に残されなかったか、後世においても判然としない。ただ、ヒルダへの非難が内務省系の官僚から出始めたのは確かなようで、これは国務省を『外交』の舞台から引きずり下ろすための口実だったのは確実である。何しろ国務尚書マリンドルフ伯爵がヒルダの父なのである。

ラインハルトやキルヒアイス、あるいはヒルダの目や耳にもとどかぬところで密かに繰り広げられた暗闘は、やがて軍に飛び火するが、この時はすでに省庁間の縄張り争いから、ヒルダ個人への非難攻撃に大きく変質していた。

「幕僚総監代行の判断は帝国軍の兵力をいたずらに分散させ、バリーミオン星域での劣勢を招いたのである。これは重大な利敵行為と言つべきである」

「個人の判断においてキルヒアイス提督を説き、正統な命令によらずして兵力を前線へ動員せしめたこと、これは明らかに命令系統の破壊である。結果において帝国軍を勝利に導いたとは言え、同盟政府の移動に関する情報がフェザーンからもたらされていないれば、帝国軍の最精鋭を空しく遊兵たらしめ、全線での敗北を招いた可能性さえある」

これも半ばは謂われのない非難といつべきだった。キルヒアイスは、最終的には艦隊の主力を率いてバリーミオンに駆けつけており、ヒルダは僅かな護衛部隊と共にミッターマイヤーの艦隊に合流しているのである。この時点で、帝国双壁はなおバリーミオンに数日を隔てた宙域にあり、ヒルダの進言を無視してバリーミオンに駆けつけたとしても、決定的瞬間に間に合わなかったことは確実だった。

これら水面下での暗闘をラインハルトに知らしめたのは、オスマイヤー内務尚書だった。オスマイヤー自身は、『外交』に関する内務省と司法省での権限争いに困惑しており、判断をラインハルトに求めたものだった。

「現時点ではまだ内務省と司法省での角突き合いで終始しており

ますが、放置しては混乱の拡大する恐れもなしとしません。陛下のご判断を頂きたく……」

オスマイヤーのもたらした情報 特にバーミリオンでのヒルダの行動が政府・軍部内での紛糾を……また、それは火種のレベルに過ぎないとは言え……引き起こしていることに、ラインハルトは驚き、より詳細な報告をオスマイヤーに求めた。その結果が、今、ラインハルトの眼前に表示されているのである。

ノックがあり、入室を求めるキルヒアイスの声がするの、ラインハルトはほっと肩から力を抜いた。鮮やかな赤毛を戴いた長身が入室してくると、ラインハルトは従卒を呼び、二人分のコーヒーを命じる。

「ブルックドルフが厄介ごとを持ち込んできた」

問いかけではなく確認だった。

「バウアーシュミットのこと、お前は知っているのか」

青い目が微かに翳って頷く。

「知っています」

「彼が姉上の精密検査情報入手したことも、か？」

「……それは、今回の報告で初めて知りました。しかし、バウアーシュミット医師が、非常に広汎な医療情報が必要としていたことは承知していました」

一呼吸置き、キルヒアイスは従卒の運んできたコーヒートを口にする。カップを受け皿に戻す音がいつもよりやや大きく響いた。穏やかだった顔が引き締まり、鍛え抜いた鋼の表情が取って代わる。

「これは、陛下と……」

「陛下はよせ。ここは二人だけだ」

「では、ラインハルトさまとわたしだけの話にしていただけだということです。まだ、公にすることはできませんから」

「物々しいな。お前にそんな顔をされると、怖くなるぞ」

一瞬、悪童の表情に戻ってから、ラインハルトは表情を改める。キルヒアイスの表情が冗談や韜晦を許さないものであることを察するのは、ラインハルトにとって容易すぎることだった。

「バウアーシュミット医師は、ラインハルトさまがある種の病気に罹患されているのではないかと危惧していました」

「俺が……病気だと？」

キルヒアイスと二人きりの時にしか使わない一人称で呟き、ラインハルトは苦笑した。

「俺のどこが病気なのだ？」

「それが分かれば苦労しません」

さすがにキルヒアイスも苦笑せざるを得なかった。

「病気がどうかも分からないのですから。バウアーシュミット医師の取り越し苦労の可能性の方がはるかに高いのです」

通りすがりに買った宝くじが一等賞を当てるのよりも低い確率だ。キルヒアイスはバウアーシュミット医師の言葉をそのままラインハルトに伝える。ラインハルトが大きく息をつき、首を振ると、黄金の髪が金糸さながらに光を孕んでその頭部を包む。

「そのために、こんなことをさせたのか」

「それは……バウアーシュミット医師の自発的な意思によるものです。マリンドルフ伯爵は、彼から話を聞き、万一のことを考えて、研究基金の設立に……と寄せて、彼に資金を提供してくださったのです」

「お前が依頼したんだな？」

ラインハルトの問いを、キルヒアイスは否定できなかった。もう一口、大きくコーヒーを嘍ると、諦めたように頷く。

「ええ」

「伯爵ではなくて、フロイライン・マリンドルフの方だろう、違うか？」

「……それも、ご存じでしたか」

「知っていたのではない。他に考えられないからだ」

ラインハルトもコーヒー・カップを取り上げ、最高レベルの素材と技術の投入された褐色の液体の厚さと香りを楽しむかに見える。もつとも、コーヒーにも紅茶にも特に嗜好はなく、銘品に対しても冷淡であることが多いラインハルトであるから、考えをまとめるために間を置いたというにすぎないのだが。

キルヒアイスは金髪の親友の沈思に敢えて割り込むことはせず、コンソールと紙の双方に交互に視線を走らせている。その眉間がいつになく険しかった。

「キルヒアイス……」

「ラインハルトさま……」

二人が同時に顔を上げ、発した声がダブった。キルヒアイスが咳払いして、発言を譲るのに、ラインハルトは再び苦笑した。

「この件はお前に任せる。ブルックドルフの件とオスマイヤーの件の両方だ」

「分かりました」

「……俺はフロイライン・マリンドルフを信頼している」

不意の言葉にキルヒアイスは驚いて目を瞪る。その視線の先に、

珍しくも白哲を僅かに紅潮させたラインハルトの姿があった。

「おかしいとは思わないか、キルヒアイス。同時にこれだ。話は違っていても、どちらも最終的な狙いはフロイライン・マリンドルフだ」

「ラインハルトさまもそうお思いでしたか」

「当たり前だ。その辺の三文小説でももう少しましな筋書きを使うぞ。見え見えではないか。最終的にはフロイライン・マリンドルフを糾弾し、俺の傍から引き離すのが目的だ。俺から有能な秘書官と幕僚総監を奪い取って、何か帝国にメリットがあるのか？」

「そちらですか……キルヒアイスの微笑はやや複雑だった。」

「帝国にはメリットがありませんが……その三文小説を書いている人物にとっては何らかのメリットがあるのでしょう。ともかくこの件は、帝国大公府で預からせて下さい。いささか強引なことになるかも知れませんが、よろしいですね？」

「それはお前に任せる。こんな馬鹿な話は今度だけで沢山だ……ただ、バウアーシュミットの件だが、無罪放免だけは駄目だ。ブルックドルフには既に譴責を命じてあるし、彼のやったことは見過ごすにはできない。今更言つまでもないことだとは思つが」

「確かにお預かりしました、ラインハルトさま」

ところで、そのマリンドルフ伯爵からなのですが……キルヒアイスが切り出したのが、キუნメル男爵からの男爵邸への行幸希望だった。一瞬間を攫めたラインハルトだったが、キუნメル男爵がヒルダの従弟であり、リップシュタット戦役では積極的にラインハルト陣営を後援したこと、さらに病弱の故に戴冠の式典には出席できなかったため、新皇帝の最初の行幸を希望しているとの事情を

説明されると、あっさりと頷いた。

「良かるつ。ただ、その前に、この件を片付けておいてくれ、キルヒアイス」

キュンメル邸行幸を即断したラインハルトの心理を、キルヒアイスは直ちに理解できた。貴族の一員とは言え、旧帝国時代でもさして有力とは言えぬ家門であることもさりながら、マリーンドルフ伯爵家につながる一族であることも預かって力になったに違いなかった。ラインハルトにしてみれば、ここ数ヶ月間のマリーンドルフ伯爵家に、特にヒルダに対する誹謗や中傷に似た帝国政府・軍部内での動きに腹を据えかねている部分があるに違いなかった。マリーンドルフ伯爵家の連枝たるキュンメル男爵邸を、即位後最初の行幸先とすることで、こつした陰湿な動きに一喝を加える意図もあつてのことだろう。

「最優先にて、しかるべく処置致します、ラインハルトさま」

ブルックドルフ司法尚書が持参していた紙の書類を預かり、キュンメル男爵は姿勢を正した。

「今ひとつ、ご相談したき事項がありますが、よろしいでしょうか」「なんだ？」

「ノイラント辺境伯領域という辺境宙域があります……いえ、正確にはありません、と言つべきですが」

旧帝国が国家として力を注ぐことの少なかったこともあり、帝国の辺境開拓はしばしば個人の手任せに委ねられてきた。貴族でも継嗣の見込みのない末子や、事業や投資などで富を築いたものの、宮廷とのつながりの薄さのゆえに帝国中央での地位に不安を覚えた平民などが多く、彼らは開拓後の宙域を皇帝直轄領として差し出すの

と引き替えに、開発の勅許を得た。無論、直轄領となつても税収の三分の一は開拓者の取り分として残され、さらには辺境伯の爵位が与えられて、宮廷への伺候をも許されるのだ。ただし、開拓の成功率は高いとは言えず、多くの恒星系は開拓半ばにして放棄され、時には宇宙海賊の根拠地や内紛に敗れた貴族の逃避先として利用されて、帝国の治安当局の悩みの種となった。

キルヒアイスが話題にしたのは、二〇〇年余り前まではノイラント辺境領と呼ばれ、現在はフェール星系となつていて有人恒星系だった。開拓が緒に就いたばかりの辺境領はたいていの場合、新領土と呼ばれ、これが変じてノイラント辺境領とも呼ばれることが多いので、これは固有名とは言えない。さらに時代が進み、皇帝直轄領や他の大貴族領に属するようになると改めて名が与えられるのが通例である。

「……たしか、かつてのリンダーホーフ侯爵領のあたりだな」

流血帝アウグスト二世を打倒し、エーリッヒ二世となつたリンダーホーフ侯爵が領していたのは約二〇〇年前。エーリッヒ二世が即位して後は皇帝直轄領となり、リンダーホーフ侯爵家そのものも廃されている。現在も、帝国領の中枢にあり、多くの輸送・通信・開発の中継基地の置かれる交通の要衝でもある。フェール星系はリンダーホーフ星系からさらに二〇〇光年ほど離れた宙域にあり、流血帝に対するリンダーホーフ侯爵の蜂起に際して、同地を領するスミロ・フォン・ノイラント辺境伯が侯爵の下へ駆けつけた記録が残されている。

「このスミロ・フォン・ノイラント辺境伯ですが、その五代前がアルフレート・フリードリヒ・フォン・シュミットバウアー伯爵であつ

たとの記録があります」

「ほう、シュミットバウアー一族……だと？」

ラインハルトの表情が一瞬険しくなり、それから苦笑に溶けた。

「あのシュミットバウアーか？」

「ええ、そのシュミットバウアー……です」

シュミットバウアー一族については、これまでも様々に述べられているので、ここでそれを繰り返すのは避けたい。ただ、ゴールデンバウム王朝初代皇帝ルドルフに仕え、その登極に大きく資したのみならず、五〇〇有余年にわたりゴールデンバウム帝室への忠節を貫いた希有の一族である。そして、シュミットバウアー家の最後の一人、コルネリア・ゲルトルーデがラインハルトの帝国での覇業に立ちふさがった最後の一人でもあった、と説明しておくにとても。

「ジギスマント二世の時代に宮廷を逐われ、辺境伯としてノイラント……フェールへ左遷と言つか、追放されたということのようですよ」

「痴愚帝か。いずれ、シュミットバウアーのことだ、面を言して諫言し、痴愚帝本人が、その側近に疎まれた拳げ句ということだな」

「ええ……」

帝都^{オプデン}を逐われた時の当主アルフレート・フリードリヒから五代約一〇〇年、時は流血帝アウグスト二世による流血の天蓋が宇宙を覆い尽くし、『死中に活を求める』として起ったリンダーホーフ侯爵のもとに三人の提督と、一〇数名の辺境伯が駆けつけたと言つ。「その提督の一人がコンラート・ハインツ・フォン・ローエンングラム……だったな。シュミットバウアーとはその時からの腐れ縁とい

うやつだな」

コンラート・ハインツと姓を共にするとは言え血縁関係はないし、『縁』などという曖昧な関係を認めるものでもないのだが、ラインハルトもこうした歴史のエピソードは嫌いではない。彼の場合、歴史のエピソードを聞き知り読み、それを楽しむだけでなく、歴史に対して自らの生の軌跡を刻み込んでいく立場でもあるのだから。

「シュミットバウアーの話が面白くないというのではないが、銀河帝国皇帝と帝国大公が時間潰しに使うような話題でもあるまい？」

「ええ、お許し頂きたいのは、このフェールへの調査実施です」

「二〇〇年以上も前のことだぞ、記録など残っているのか？」

「旧ノイラント辺境伯の館と文書館は現在も管理され、保管されていることが分かっています。シュミットバウアー一族が残した記録や文書もその中に含まれている可能性があります。残念と言つべきかどうか分かりませんが、シュミットバウアー一族の血縁者はもうフェールにも一人も残っていないようですが」

ラインハルトの許可の下、これまで非公開だった旧帝国の、特に皇帝と大貴族 および宮廷に関する極秘資料が公開調査の手に委ねられている。いずれ、それらは整理され、『ゴールデンバウム王朝史』として公刊される見込みである。無論、皇位の継承時や内紛に際して廃棄されたり紛失したりした記録も少なくなく、特に流血帝アウグスト二世から、晴眼帝マクシミリアン・ヨーゼフ二世にかけての約一〇〇年間、しばしば『帝国中史』と呼ばれる時期は記録の散逸が多く、百日帝グスタフの死因や晴眼帝の視力を奪った犯人さらにコルネリアス二世時代の叛乱事件の真相についても諸説が乱立している状態だった。

この調査の一端に、現フェール星系、旧ノイラント辺境伯領を加えること、それがキルヒアイスが許可を求めた内容だった。旧ノイラント辺境伯時代は、ちょうど痴愚帝ジグスマント二世から敗軍帝フリードリヒ三世の時代にかかる。貴重な情報が眠っている可能性は高かった。

「ウィルヘルム二世……第二九代皇帝です。この時代に、シュミットバウアー伯爵の当主が所蔵の記録を帝国公文書館に収めていますが、同時に記録のコピーを保持していたものと思われま

す。公文書館に収められたはずの電子記録……キルヒアイスの意を受けて帝国公文書館に赴いた、彼の副官タウゼントシュタイン大尉によって、その記録一切の廃棄が確認されたのは、新皇帝ラインハルト即位直前のできごとである。

その後、『宮廷の噂』として文書のコピーの存在をキルヒアイスに伝えたのはマリンドルフ伯爵だった。噂の確認のためにキルヒアイスが招いたのは、最後のシュミットバウアー家当主の忠実な執事であった老人、ハンス・トーンとその夫人だった。現在は、主人一族のかつての居館といえるほどの規模もないのだが……での余生を送る毎日であるという。

トーン夫妻も文書の存在は知っていたが、所在までは知らされていないかった。キルヒアイスは落胆したが、しかし、夫妻のもたらした情報の中にフェール星系、かつてのノイラント辺境領の話があったのである。シュミットバウアー伯爵家とノイラント辺境伯家のつながりなど、初級学校はおるか大学や軍士官学校の史学のコースでさえ語られていない、帝国の裏面史と言って良い。

かつ、トーン夫人が懐中してきた古い日記の中、コルネリア・

ゲルトルーデと彼女の兄ヨハン・クレメンツが、それぞれただ一度だけ首都星系外への旅をしているという事実だった。行き先はいずれもフェール星系。シュミットバウアー男爵家の継嗣すらままたらなかつた彼らが、決して安価とは言えない旅費を費やして赴くからにはそれなりの理由がある。そう判断するのは安易に過ぎるとは言えないだろう。

「ふむ？」

キルヒアイスの説明に、ラインハルトは僅かに眉間に皺を寄せた。

「分かった。フェール星系への調査は許可する」

「ありがとうございます、ラインハルトさま」

立ち上がり、深々と一礼するキルヒアイスの前髪を、白大理石の彫像を思わせる指が絡め取ると、軽く引つ張った。思いもかけぬ友人の行動に、危つく失いかけたバランスを取り戻したキルヒアイスの視界の直ぐ近くに、先鋭な蒼氷色の双眸が閃いた。

「ラ、ラインハルトさま？」

「キルヒアイス、俺に何を隠している？」

「な……何も隠してなどいませんが」

「では、何のためにシュミットバウアーにこだわるんだ？ やつらが何をこれ以上、隠しているというのだ？」

「彼らは何も隠していません。ですが、これから先の帝国を考える上で手に入れば助かる、と思われるような書籍や記録を彼らが持っているかも知れません。手に入れば幸運、その程度のことです」

「……そつが」

しびしび、という様子でラインハルトはキルヒアイスの髪から

手を離す。

「じゃあ、その書籍なり記録なりが手に入ったら、真っ先に俺に話せ。それだけは約束しろ、キルヒアイス」

「勿論です。最初にラインハルトさま……いえ、皇帝陛下に」ご相談します」

「冗談にするのはよせ、俺は真剣なんだからな」

「それも分かっております、ラインハルトさま」

「……ならしい」

まだちょっと不満そうに唇を歪めたラインハルトだったが、一応は納得したようだった。しかし、キルヒアイスが退出するその背を追った声が、彼の背に冷や汗を浮かばせた。

「キルヒアイス、俺に隠し事だけはしてくれな。俺はお前を信じている」